

“Mixing Memory and Desire”

J. D. サリンジャーの「ガラス家の物語」における「時間」

増田 樹理菜

はじめに

J. D. サリンジャーの「ガラス家の物語」は、神童ぞろいのガラスきょうだいの中でも特に優秀な長兄シーモア・ガラスの自殺を軸として、その余波や残されたきょうだいの変化を描いている。これまでの研究では、東洋思想や宗教的な祈り、サリンジャー作品に共通するイノセンスといった観点から、「ガラス家の物語」が分析されてきた。また、これらのテーマは、サリンジャー自身が第二次世界大戦でいくつもの戦闘を経験し戦争神経症と診断されたことや、禅の思想に影響を受けたこととも関連付けられてきた。しかし、これらのテーマは個別に扱われることが多く、関連付けられることはほとんどなかった。

本研究では、従来の研究の枠を超え、「時間」という観点から「ガラス家の物語」を読み解くことを試みる。時間は、記憶や感情など人間の営み全体にかかわる普遍的な概念であり、ガラス家の人々の感情や思考を形作る重要な軸でもある。時間に注目することで、従来の研究で単独で扱われてきた要素を横断的に結びつけることが可能になる。また、このような読みは、「ガラス家の物語」のみならず、サリンジャーの作品全体に共通する「若者の孤立」や「存在の意味」といった根源的な問いに迫るための手がかりともなりうる。時間という普遍的な概念を研究に取り入れることで、現在に至るまで若者を中心に多大な支持を得るサリンジャー作品の本質に、より深く迫ることが可能になるだろう。

トラウマと不可逆性 “A Perfect Day for Bananafish”における時間

“A Perfect Day for Bananafish”は「ガラス家の物語」の起点となる作品であり、物語群の中心的な出来事であるシーモアの自殺を描いている。冒頭のミュリエルと母親との電話の場面では、シーモアの従軍経験、精神疾患、退役後の自動車事故が語られる。木への衝突は森林での戦闘を想起させる出来事であり、彼がフラッシュバックを引き起こすきっかけになったと考えられる。シーモアの戦争体験は現在へと唐突に侵入し、同時に戦争以前と以後の時間を断絶させる。シーモアの間は、トラウマ体験によって回復不能な状態に陥っている。

中盤で描かれる少女シビル・カーペンターは、幼い外見を持ちながら嫉妬深さを見せ、サリンジャー作品における理想的な子ども像とは異なる存在である。また、女預言者シビュラに由来する名前を通して、老いと死、時間の不可逆性を象徴する存在として位置づけられる。さらに、物事の本質に目を向けるシーモアの姿勢は、“Raise High the Roof Beam, Carpenters”で語られる九方阜の逸話に端的に表れている。色や性別に頓着せず馬の素質を見抜く九方阜は、“A Perfect Day for Bananafish”でシビルの水着の色を見間違えるシーモアの姿と重なる。シーモアの目には、シビルは単なる子どもとしてではなく、名前が示すように、老いや死を免れ得ず、過去に戻ることでできない時間の不可逆性を示す存在として映るのである。

シーモアがシビルに語るバナナフィッシュの寓話は、シーモア自身の人生と重なる。バナナフィッシュはバナナの入った穴に泳いでいくと、バナナを豚のように食べつくす。バナナフィッシュは太りすぎて穴から出られなくなり、やがて死に至る。穴に入る前と入った後では、バナナフィッシュの運命は決定的に分断されており、もはや元に戻ることはできない。同様に、シーモアの間も戦争以前と以後とで分断されている。シーモアがこの寓話を語る相手が預言者の名を持つシビルである点を踏まえると、バナナフィッシュの物語は単なる空想ではなく、シーモア自身の告白であり、同時に自らの死の予告でもある。

以上のように“A Perfect Day for Bananafish”は、トラウマによる過去の侵入と時間の不可逆的な断絶として、シーモアの歪んだ時間感覚を象徴的に描いている。

時間の停滞と祈り “Franny”における時間

“Franny”はガラス家の末の妹フラニーが信仰と自己認識の危機に直面する過程を描いている。冒頭では、恋人のレーン・クーテルがフラニーからの手紙を読んでいるが、手紙に見られる曖昧な表現は、彼女の時間感覚がすでに揺らぎ始めていることを示唆している。二人はレストランで昼食をとるが、二人の会話は噛み合わない。他者からの評価や時計が刻む時間を気にするレーンの社会的な時間意識は、彼の価値観を空虚に感じるフラニーの内面的な時間意識と対立している。また、レーンが次々と料理を口にするのに対し、フラニーは皿にほとんど手を付けない。彼女の停滞した時間感覚は、食事という最も身体的な行為にすら及んでいない。

やがてフラニーは『巡礼の道』という本に基づいた祈りに没入する。イエスの祈りを繰り返し唱えることで、身体を通じて新たな時間を作りだそうとするのである。トイレの個室という閉ざされた空間で行われる祈りは、社会的で直線的な時間に代わる、内的で静止した時間を形成する。こうした姿勢は、*The Catcher in the Rye* でホールデン・コールフィールドがイノセンスを求める姿と重なる。フラニーもホールデンも虚栄心に満ちた社会や人々を嫌い、俗世の時間から解放されることで、永遠にイノセンスを保持しようとしているのである。

以上のように、“Franny”は、社会的時間に適応できないフラニーが、祈りの反復を通じて内的で静止した時間を生み出すことで、イノセンスの保持と救済を模索する物語として読むことができる。

過去に留まる時空間 “Zooney”における時間

“Zooney”は“Franny”でフラニーが倒れた二日後の様子を描いた物語である。フラニーはレーンと週末を過ごすことなく自宅に戻り寝込んでしまう。そのグラス家の浴室では、六番目のきょうだいゾーイーが、バディから四年前に送られた手紙を読んでいる。手紙からは、バディがシーモアの死を受け入れつつも、現在もシーモアの存在を信じ、確認しようとする様子がうかがえる。空間的に離れた場所を繋ぐ道具である電話を、バディは離れた時間を媒介するものとして用いている。また、バディだけでなく、父親レスやゾーイーも過去に囚われている。彼らにとって過去は単に過ぎ去った時間ではなく、現在の生活に影響を及ぼし続ける、生きた時間なのである。

この時間の停滞は、一家が暮らすアパートメントの描写からも読み取れる。*Valhalla* に例えられる居間の壁一面には、過去の栄光を示す写真やトロフィーなどが飾られており、空間そのものが過去を祀る展示室の機能を果たしている。家具や小物は処分されずに積み重なっており、時間の堆積物としての意味を持つ。アパートメントにはペンキ屋が部屋の塗り替えに来ているが、居間には依然家具や小物が置かれたままであり、ペンキの塗り替えによって部屋が新しくなるのを拒んでいるようである。家族の暮らすアパートメントは時間が停止した空間であり、グラス家の人々はその内部で過去に生き続けているのである。グラス家の空間全体が過去に留まっていることは、ゾーイーの発言でも裏付けられる。ゾーイーは、フラニーの神経衰弱の原因は、シーモアをはじめとする家族の影に満ちた自宅にあると主張する。そしてゾーイーは、これまで目撃した神経衰弱の患者は場所を選ばなかったと述べ、場所を選ぶフラニーを痛烈に批判する。しかしこの比較はフラニーに自身の弱さを自覚させると同時に、グラス家の空間が過去の亡霊に満ちた異様な空間であることを浮かび上がらせる。

フラニーの説得を一旦切り上げたゾーイーは、以前シーモアとバディが使っていた部屋に足を踏み入れ、バディを装いフラニーに電話をかける。フラニーは電話のある両親の寝室へ向かうが、その際若返りのような変化を見せる。ペンキの匂いや電話のベルの音など五感を刺激する要素は、フラニーを過去へと呼び戻す。彼女の着ていたシルクのガウンは子ども用のバスローブへと変化するが、これは精神が退行しているのではなく、エゴや欺瞞に満ちた世界から脱却する過程として読める。過去の時間に満ちた空間の中で、彼女は長い停滞のち、ようやく偽りの自己を脱ぎ捨て、本来の自己へと回帰しようとしているのである。

このように、“Zooney”では、グラス家の空間全体が過去を閉じ込めた閉鎖的な場として描かれている。その停滞した時空間の中で幼いころの記憶に触れることで、フラニーは本来の自己と再び出会い、停滞から再生へと向かうのである。

おわりに

本研究では、先行研究で扱われてきた祈りやイノセンスといったテーマを「時間」という観点から分析した。これらのテーマは従来指摘されてきた純粹さや悟りを象徴するだけでなく、登場人物たちの時間感覚に強く影響を与えている。そしてグラス家の人々が、直線的で社会的な時間の流れを逸脱し、それぞれ異なる形で「歪んだ時間」を生きているという点を明らかにした。今回は「グラス家の物語」のみを議論の対象にしたが、*The Catcher in the Rye* を始めとした他のサリンジャー作品も、同様に「時間」という観点からの分析が可能だろう。登場人物たちが生きる時間を意識することで、彼らの心理や関係性に新たな視点をもたらし、時間と人間のかかわりを考える新たな視座を提供するはずだ。